慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・ブリントン著 河原宏・浅沼和典共訳 近代精神の形成
Sub Title	Crane Brinton; The shaping of the modern mind
Author	村田, 光義
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.2 (1961. 2) ,p.156(80)- 157(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19610201-0081
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610201-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家政策の歴史的発展の跡が辿られている。そして第三部において戦後の福祉国家イギリスで行なわれた実際の経済政策が検討され、その問題点が解明されている。特に福祉国家政策の支柱ともいえる社会保障政策については詳細に検討されており、裨益させられるところが多い。

戦後の英国は福祉国家的行き方をとった代表的な国として、世界の注目を浴びてきたが、経済成長が緩慢すぎる点や、インフレや国際収支の問題などでいろいろな困難を経験しているので、こうした困難が福祉国家の責任であるかの如く論ずる者も少なくない。しかし、長教授はそれらの諸問題を検討することによって、それが必ずしも福祉国家の責任でないことを明らかにする。こうして、福祉国家政策をあくまで擁護し、福祉国家建設の道を示唆したいというのが本書の意図であるように思われる。（東洋経済新報社・一九五九年・A5・二九九頁・五五〇円）

—丸尾直美—

* * *

C・ブリントン著
河原宏・浅沼和典共訳
『近代精神の形成』
Crane Brinton; The Shaping of the Modern Mind, New York, 1953 (Ideas and Men: Chapter 8-15)

「革命の解剖」その他の著者として有名なハーヴァード大学歴史学教授C・ブリントン（1898～）は、本書において彼の従来の史的研究から一歩を進め、各分野にわたる博識をもって一般思想史の面から近代精神の形成とその展開をながめ、近代精神によってたつ西欧民主主義の今後のありかたを見ようと試みる。

先ず彼は、思想と物質的条件とは人間行為において相互作用をもつものと規定し、各時代の思想をみるに当ってはエリートの思想のみならず、大衆の誰しもがもつ生活様式の一部としての人生観—世論というものにまで目をむけるのである。こうした態度をもって十五世紀以後の西欧を対象とし、近代精神の形成をヒューマニズム、プロテスタンティズム、合理主義の三つの平行した流れの交錯の下にとらえる。そしてこのなかから現われてきた意見の多様性が、どのように発展し、その深さとひろがりがどのように変化してきたかをさぐることによって、彼は第一に自己の人生観を明確にすること、第二に他人の人生観を理解することによって他人とより円満な生活をしうるようになることを望むのである。すなわち啓蒙思想の所産としてのデモクラシーの正常な状態を意見の多様性にみる。しかるに現代思想の多くが啓蒙思想の嫡流として、人間の自然的善性、合理性の教義を中心とすることに対し、著者はこのアンチテーゼとしての反主知主義を重視する。しかし彼は反主知主義に影響はされるが、同調はしない。ただ現実と理想との緊張関係を、理想を現実に近づけることによって、緩和しようとするのである。かくてこの方法こそ真の、すなわち理想的でも冷笑的でもない、現実主義に基づいたデモクラシーを可能ならしめるものであり、こうしたことの可能な健全な社会の存在を疑ってはならないというのが著者の結論である。

これまで思想史面にすぐれた業績のみられなかったアメリカにこのような労作が現われたことは注目に値しよう。そしてわれわれは改めて、人々の心に深く根ざす民主主義というものについて考えさせられるのである。（早稲田大学出版部・B6・三七二頁・四五〇円）

—村田光義—

* * *

大島清・斉藤晴造
加藤俊彦・玉野井昌夫 著
『金融論』

従来、信用理論の分野では「資本論」研究の一端としての、とくに第三部・第五篇を中心とした利子生み資本論としての研究がなされ、飯田繁氏の「利子つき資本の理論」（一九五四年）、信用理論研究会の「講座信用理論体系」全四冊（一九五六年）をはじめ、宇野弘蔵氏、川合一郎氏、三宅義夫氏、麓健一氏などの諸労作、また銀行券論争などと、いわば原理的視点からの研究が多い。そのことは信用理論が、いまだ新しい研究領域であることを示しているといえるし、また、「資本論」の論述にもみえるとおり、信用理論が豊富な事実認識の上にたってでなければ真に体系化しえないという困難さによるところも多いであろう。かかる意味合いにおいては、信用理論の展開は厳に論理的歴史的でなければならないと考えられる。

しかるに、こうした条件の中から、独自の体系化の企図もあるのであって、渡辺佐平氏の「金融論」（一九五四年）および本書などは体系化への指標をそれなりに示唆しているといえよう。だが本書の意義は、たんに信用理論の体系化にとどまらず、信用理論を基軸にした金融論という領域を設定し、それをマルクス経済学の中に体系づけるという基本的問題にもせまろうとしているところにある。

いわゆる「宇野理論」の立場にたって書かれている本書は、金融論を原理論とはことなった視点からながめる。そして『金融論』というのは資本家的生産方法に必然的に随伴し展開される信用、その形態、制度、および金融政策を究明することであるが、しかしそれは、原理論が取扱うばあいとは異なっている。『金融論』が対象とするのは、資本主義の歴史的な発展段階に対応して形成・展開される信用形態、制度、金融政策である」（一頁）というように段階論の問題としている。原理論における信用論（＝利子論）を一九世紀四、五〇年代のイギリス銀行制度からの抽象であるとし、重商主義段階から産業資本主義段階における銀行業の典型的発展・展開を金融市場確立の見地からイギリスに、独占段階における銀行制度を、株式会社との結合、金融資本の成立・発展と共にドイツにもとめ、アメリカ、日本の銀行業の変遷を、それぞれの資本主義の生成・発展の特殊性のなかでみることにより、段階論における銀行制度の歴史的な発展過程の類型化をこころみている。従って、信用理論が銀行制度の生成・発展の論理をも説明するものとして措定されていないところに本書の特殊性もあり、また問題もあるといえよう。（東大出版会・A5・三六八頁・五八〇円）

—飯田裕康—

* * *